

❁ 雪国の生活文化と縄文文化の伝統 - 雪上歩行具

『津南町史 資料編 下巻』 津南町役場発行より抜粋

編布(あみぬの = アンギン)と死皮(しひ)をまとい、足には何をはいていたのであろうか。特に積雪(せきせつ)地帯(ちたい)の場合には、この雪上歩行具が重要な問題である。日常生活でもそうであるが、特に冬の狩猟(しやうりやう)では生命(せいめい)にかかわる問題である。

そして、すでに戦前(せんぜん)において、縄文(じゆんぶん)晩期(ばんき)の青森県(あおもりけん)八戸市(やちほし)是川(せがわ)遺跡(いせき)からカンジキが出土(しゅつど)しているが、従来のほとんど関心(かんしん)が払(はら)われていないのはどうしたことであろうか。しかも実物(じぶつ)は、現在(げんざい)でも八戸市(やちほし)歴史民俗資料館(れきし民俗資料館)に保存(ほぜん)されているのである。

杉山(すぎやま)孝男(たかお)氏は、「太(お)い蔓(ま)を編(あ)いたものを集合(しゆごう)して芯(こ)となし、それに同一(どうい)蔓(ま)状(じやう)のものが幾重(いくじゆう)にも巻(ま)かれてある。……その形態(けいせい)はあたかも雪国(ゆきくに)に属(ぞく)するカンジキの外(がい)かきを失(う)ったやうにも見(み)られる。」と、記(き)している。丈夫(ぢゆうぶ)な外(がい)かきに対し、弱(じやく)った中(ちゆう)側(がわ)が、まるで切(き)れたで駄(だ)の帯(おび)緒(むす)のように捨(す)てられたのであろう。

❁ かんじき

『北越(ほくえつ)雪語(ゆきご)』 岩手(いわて)県(けん)立(た)つた者(もの)より抜粋(びやくすい)

かんじきは楕(だ)円(えん)形(けい)なり。里(さと)俗(ぞく)、かじきといふ。たて1尺(いちせき)2、3寸(さんすん)、よこ7寸(ななすん)5、6分(ぶぶん)形(けい)圓(えん)のごとく、ジヤガウ(ぢやがう)といふ、木(き)の枝(えだ)にて作(つく)る。糸(いと)は及(およ)ばら(ら)ス、フマイブ(ふまいぶ)といふ蔓(ま)又はカヅラ(かづら)といふつるをも用(もち)ふ。山(やま)津(つ)の肉(にく)付(つ)きの皮(かわ)にて巻(ま)きかたむ。これは、前(まへ)に固(かた)まる菅(わ)の下(した)に巻(ま)くものなり。雪(ゆき)にふみこまざるためなり。



江戸時代の
カンジキ



是川(せがわ)遺跡(いせき)出土(しゅつど)
カンジキ杖(じやう)状(じやう)欠(けつ)